

江

山文庫のほど近く、滝

地区を走る町道滝桜内

線沿いには、俳人・高浜虚子の

秋の俳句を刻んだ句碑を見ることができます。

この句碑は、江山文庫が所蔵する虚子直筆の掛軸をもとに制作されました。刻まれている俳句は、大正4年9月、虚子42歳のときに詠まれたものです。

ひんがしに日の沈みをる花野哉

虚子

【説明】

冒頭にある「ひんがし」とは東のこと。季語は「花野」で、秋の草花が一面に咲き乱れる広い野原のこと。

【句意】

東の方から夜が明けはじめた。薄明かりの空は次第に明るくなつてゆくが、太陽は未だ顔を出さない。しかし秋草が一面に咲いた花野は、すでに明け方の紫を帯びた微妙な光を受け、美しく輝いている。

当時、虚子が弟子たちとともに開いていた俳句の鍛錬会「俳諧散心」の第九回席上で詠まれたもので、与謝野町を題材にし



高浜虚子句碑

●	●	●	●
●	●	●	●
●	●	●	●

● 場所／与謝野町字滝
● 材質／舞鶴産硬質砂岩
● 設置年／平成16年
● 設置者／加悦町(当时)

与謝野町の花「ひまわり」に代表される夏の花々が元気いっぱいに咲き乱れる炎天下とは趣きの異なる、秋の野原のひっそりとした夜明けの美しさや風情を楽しむ一句といえます。

また、同じ滝地区内の加悦椿文化資料館前には、虚子の孫で江山文庫俳句大賞の初代選者を務めた稻畑汀子の句碑も見ることができます。

時の贈り物 [第42回 岩滝大名行列の由来]

まちの文化財

現

在残る記録では、旧岩
滝村（現在の与謝野町

字岩滝）を中心に、嘉永5年
(1852)に開催された「大
祭り」で披露された時代行列が
岩滝大名行列の最も古いもので
す。

出石藩のお家騒動「仙石騒動」
で減封となつた行列道具の払い
下げ品が、御用商人として出石
藩と深い関わりのあつた蒲田久
兵衛という商人によって岩滝に
寄付されたことをきっかけとし
て、大祭りで大名行列が披露さ
れることになったようです。

元は岩滝大祭りのメインを飾
る芸能として始まつた大名行列
もその後は、丹後ちりめん祭り
や岩滝町制施行記念行事の一環
として不定期に行われるようにな
りました。その間、戦時中の
中断や不況などによる長期間の
ブランクを何度も経て、道具類

の損傷や継承者の人材不足も経
験しました。



昭和32年当時の
大名行列の様子

岩滝大名行列
●種別／未指定文化財
(無形民俗)
●保持団体／岩滝大名
行列保存会

(与謝野町教育委員会)

しかし、平成3年5月に岩滝
町制施行70周年を記念して31年
ぶりに披露し成功を収めました。
また、平成7年には岩滝町大名
行列保存会が結成され、奴振り
や祭り全般の進行を継承し維持
しています。以降、10年に一度
の開催を目指して活動し、平成
13年にも町制80周年施行記念行
事として披露されました。

与謝野町が誕生して3年以上
が経ちましたが、岩滝町大名行
列は「岩滝大名行列」と名称を
変え、引き続き与謝野町の祭り
として受け継がれつつ、平成23
年の開催に向けて新たに準備が
進められています。

10年ぶりに町民の皆さん面前
に披露される豪華な時代行列の
装飾や、奴振りで繰り出す勇壮
な舞と放下芸（曲芸）を楽しん
でいただけることと
思います。

石

川にある福寿寺の駐車場から東へ抜ける道を

奥の階段を上った場所に上田観音堂があります。ここには、通称「上田の観音さん」と呼ばれる親しまれている木造聖觀音菩薩坐像があります。

聖觀音菩薩坐像は、室町時代の仏像で、高い宝髻（高く盛り上がった髪型）を結い、条帛や天衣と呼ばれる布を肩から掛け、左手に蓮華を持ち、右手は正面にかさしっています。普通、室町時代の仏像は小型のものが多いうですが、この仏像は高さが約95cmでこの時代としては珍しく大型の仏像です。顔立ちがやや面長なところや、衣のひ



- 場所／与謝野町字石川・上田観音堂
- 指定等／与謝野町指定文化財(彫刻)
- 管理者／福寿寺
- 製作年代／室町時代

(与謝野町教育委員会)

だの流れがやや固いイメージで表現されているところなど、室町時代初期の特徴を表しておる苦難に救いの手をさしのべてくれる仏として信仰されています。觀音菩薩は、世の中のあらゆる願いに応じたさまざまな姿に変化し、願い事を叶えるために現われるといわれています。

また、一説には、香河に伝わる如意尼伝説に由来する仏像で、如意尼が石川に創建したとされる慈觀寺にゆかりのある仏像だともいわれています。



謝野町立古墳公園は、
史跡・蛭子山古墳と史

跡・作山古墳を整備した国内有

数の歴史公園です。

蛭子山古墳群は、今から約1650年前に造られた大型前方後円墳の1号墳を盟主として、現状では4基以上の古墳で構成されています。作山古墳群は、蛭子山古墳の南隣りにあり、前方後円墳・円墳・造出付円墳・方墳などバリエーション豊かな墳形の古墳で構成された古墳群です。



中央の白線は蛭子山1号墳、その右側は同2・3号墳。中央下から右斜め下にかけては作山古墳群（いずれも昭和5年7月8日に国の史跡に指定）

両古墳群の発見は、昭和2年3月7日に発生した北丹後地震によって、蛭子山1号墳の頂上にあった社殿が倒壊し、昭和4年秋の再建工事で地中から巨大な石棺が発見されたことに始まります。この発見は当時大騒ぎとなり、多くの見物人でにぎります。

本格化した発掘調査によつて、日本海三大古墳に代表される古代丹後の権勢は、日本海を通じた朝鮮半島・中国大陸諸国との鉄を中心とした海外交易にあつたと推察されるようになってきました。

しかし、1980年代以降にかけて連続して築造された丹後の「大首長墳」ですが、大和王權の大豪族たちの古墳に匹敵するその規模は長らく日本古代史の謎とされてきました。

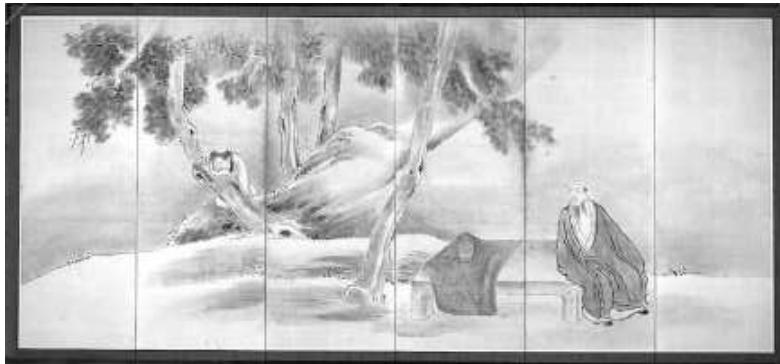
日本海三大古墳は、日本海を通じた朝鮮半島・中国大陸諸国との鉄を中心とした海外交易にあつたと推察されるようになってきました。日本古代史の中で高い歴史的価値を持つた古墳であることが再認識されています。

その後昭和40年代には、地元有志者により、慰靈祭や除草作業などに取り組む蛭子山古墳保存会が発足。平成元年度からは本格的な整備が始まり、平成4年11月にオープンしました。

日本海三大古墳といわれる蛭子山1号墳（145m）と京丹後市の網野銚子山古墳（198m）、神明山古墳（190m）は4世紀後半から5世紀初頭にかけて連続して築造された丹後の「大首長墳」ですが、大和王權の大豪族たちの古墳に匹敵するその規模は長らく日本古代史の謎とされてきました。

時の贈り物 [第45回 蕪村ゆかりの施薬寺を訪れた俳人]

まちの文化財



京都府指定文化財「方士求不死薬図六曲屏風」(部分) 与謝蕪村筆・施薬寺蔵

与

謝蕪村が丹後を訪れた際に描き残した屏風で、現在は京都府指定文化財に指定されている「方士求不死薬図六曲屏風」。

滝の施薬寺はこの屏風を所蔵することで古くから有名で、ここには蕪村を敬愛する俳人や研究者らが多く訪れました。

昭和33年冬に来訪した高野素十もそうした俳人の一人です。大正7年生まれの素十は大学時代に俳句を始め、高浜虚子に師事。虚子の『ホト

トギス』に参加しました。同期に『ホトトギス』誌上で活躍した山口誓子、阿波野青畠、水原秋桜子とともに、名前の頭文字をとつて「ホトトギス」の四Sと呼ばれました。創設のために当地を訪れ、その際に施薬寺で詠んだのが次の一句です。

昭和28年に俳誌『芦』を創刊し主宰となつた素十は、『芦』丹後支部施薬寺で詠んだのが次の一句です。

山の寺蕪村屏風を舒べて待つ

(昭和34年1月発表)

「山の寺」は、もちろん施薬寺のこと。季語は「屏風」で冬。部屋を仕切り、装飾品でもある屏風は必ずしも冬に用いられる物ではあります。が、風除けという側面から、俳句では冬の季語とされています。

蕪村の屏風を「舒べて待つ」のは寺を訪ねた作者ではなく、自分を迎える寺の住職なのですが、ここで作者は相手の気持ちになつて、寺の宝である蕪村の屏風で客人を迎える、その温かな気持ちを描いています。

高野素十の作風は自然を徹底して客観的に即物的に描写することから、「純写生派」と呼ばれました。

そんな素十も冬の寒さが厳しい丹後で人々の温かさにふれ、右の句を詠むに至つたのではないでしょうが。

(与謝野町教育委員会)

男

山地区にある板列八幡神社の境内には、近代歌壇で活躍した3人の歌人がここで詠んだ短歌の歌碑が建てられています。この碑が建立されるまでの経緯には、板列八幡神社の宮司を勤め歌人として活躍した毛呂清春の長年の想いが含まれています。

毛呂清春は、男山村（現・謝野町字男山）に所在する板列八幡神社の宮司を務める家系に明治10年に生まれました。神職を目指して現在の國學院大學で学び、国文学者で歌人の落合直文に師事して直文の設立した歌塾「あさ香社」へ入門し、門下の与謝野鉄幹（寛）とも親交を深めました。そして、明治32年には、清春から招かれた落合直文自身が丹後地方を訪れることとなり、板列八幡神社にも参詣して次の短歌を詠みました。



板列八幡神社に建立された歌碑

（与謝野町教育委員会）

この歌は、朝霧に包まれてなかなか姿を現さない天橋立をこの目

で見ようと、はやる気持ちを抱えて待つ直文の心情を表しています。

それから時を隔てること20年余りの昭和五年、与謝野寛・晶子夫

妻が丹後地方を訪れた際には、師匠の落合直文の足跡を辿って同地に赴き、次の短歌をそれぞれ詠み上げました。

御柱にわが師の御名の残るにも
ぬかづき申す岩滝の宮 寛

海の氣と山の零の石濡るゝ
八幡の神の与謝の御社 晶子

これらの歌の中には、師匠である落合直文に対する深い敬愛の心が込められています。

その後、東京へ転任した清春は、恩師の落合直文や与謝野寛・晶子夫妻がふるさとの岩滝に残したこれら足跡を後世に伝えることを切望しました。そして、地元の八幡神社有志らの援助を受けて、昭和35年4月にようやく歌碑が完成し、除幕式が行われました。

今も天橋立を見下ろす境内に、この地を訪れた3人の歌人の残した短歌が石に刻み込まれており、当時と変わらぬ天橋立の姿を望むことができます。

ふるさとのわが松島に比べ見る
朝霧晴れよ天の橋立 直文

（与謝野町教育委員会）

時の贈り物 [第47回 八幡神社末社恵比須神社の本殿]

まちの文化財

四

辻地区のほぼ中央に位置する八幡神社の境内に、恵比須神社の本殿があります。境内社のうち、最も古い建物です。

恵比須神社の本殿の創建の由緒については分かっていませんが、一説に、「現（八幡神社）本殿を文政4年（1821）に新築したとき、旧本殿を曳き移して恵比須神社本殿とした」と地元で伝えられており、八幡神社の本殿の前身ではないかとう考えもあります。

本殿は、八幡神社境内の西、五社神社と並んで東を向いて建っています。構造形式上も隅木入り春日造りという類例の少ない神社建築で、形式細部の手法の質も高く、文化的な価値が高い優れた建造物として歴史的評価されています。

本殿の建立年代は、江戸時代中期（17世紀後半）で、内陣の扉板の



恵比須神社本殿

- 場所／与謝野町字四辻1番地 八幡神社境内
- 指定等／与謝野町有形文化財（建造物）
平成8年4月23日指定

（与謝野町教育委員会）

裏には文化9年（1812）新調との墨書きが残り、屋根の葺き替えが行われたとの記録があります。近年にも自然災害により被害を受けていますが、復旧にあたっては可能な限り古材を再利用して原型を保持しており、貴重な文化財を後世に残そうとする地元の人々の努力が伺えます。

また本殿前には、七福神の恵比須さんが鯛を抱いていることには「加悦谷祭」が行われますが、ここ八幡神社では、本殿前で神楽が奉納されています。



重要伝統的建造物群保



ちりめん街道の最も南側に位置する寺院、宝巌寺の全景

存地区の選定を受けて
いる与謝野町加悦伝統的建造物
群保存地区は「ちりめん街道」
とも呼ばれ、その特徴の一つに、
寺社が集まつた寺町ながらの
風景を挙げることができます。
その中にある宝巌寺は、山号
を西莊山といい、ちりめん街道
の最も南にある寺院です。知恩
院の末寺で淨土宗に属し、開基
は慶長4年（1599）と伝え
られています。

その景観は、石段を上がつた
山腹に寺地を構え、正面に楼門
形式の山門、その奥に本堂が直
線的に位置しています。本堂に
向かって左に庫裏、右に鐘樓が
あります。現在の本堂は、入母
屋造りで、軒唐破風を付した

山腹に寺地を構え、正面に楼門
形式の山門、その奥に本堂が直
線的に位置しています。本堂に
向かって左に庫裏、右に鐘樓が
あります。現在の本堂は、入母
屋造りで、軒唐破風を付した

地域で数多くの社寺建築に携
わっています。

その本尊の阿弥陀三尊像は、
宝暦年間（1751～64）に
寄進されたもので、中央の阿弥
陀如来立像を尾藤家が、また両
脇仏のうち、觀音菩薩立像を住
職が、勢至菩薩立像を女中講が
それぞれ寄進したといわれてい
ます。また、本尊裏手に安置さ
れている町指定文化財の阿弥陀
如来坐像は、南北朝期の作とさ
れ、明和5年（1768）に角
屋彦四郎（下村家）が寄進した
ものといわれています。

現在の山門は一間二戸の楼門
形式の入母屋造りで、文化15年
(1818)に再建されたもの
で、大工の棟梁は富田清兵衛が
務めました。山門は町指定文化
財となっています。

ちりめん街道の景観の一端に
なっている宝巌寺の現在の景観
は、今から1925～180年前
にかけて形成され、時を越えて
現在に伝わっていることが分か
ります。（与謝野町教育委員会）

与

まちの文化財

謝の柴神社には、文化奉納された俳額が残っています。

とです。洒落本作家、狂歌作者としても知られる人物で、天明から文政期にかけて活躍しました。

俳額とは、寺社に祈願のために俳諧連歌や発句を記して奉

この定雅ですが、実は与謝

納した額のことです。「奉納哥僕行」と題して、連歌18首が、続いて「探題」として俳句16句が書かれています（写真）。

丹後を訪れたのは、半世紀後の文化2年（1805）。彼は、野町ゆかりの与謝蕪村の門人たちと京都で交流した人でもあります。定雅があり、丹後を訪れたのは、山田村に李洲という蕪村の来丹から約

複数の人が、「五七五」と「七七」を詠み合い、18首36行の連歌を作ることを「歌仙を巻く」といいます（歌仙＝哥僕）。ここでは、「朝ぬれて日がな一日露の秋定雅」を発句として、浦月、玉壺の2名が交互に句を連ね、歌仙を巻いています。続く探題16句の作者はそれぞれ異なり、末尾の定雅ほか、岩屋・加悦の各1名を除く13名は与謝村の俳人と思われます。

この旅で定雅は加悦、加悦奥、後野、算所、与謝、山田、石川と町内各所で地元俳人らと歌仙を巻きました。宮津・久美浜・出石などでも同様の席を持つています。



京都の有力俳人と地元の人々の親密な交流と当時の俳諧隆盛を示す資料として、この俳額は町指定文化財となっています。

冒頭の発句と探題末尾句を詠んだ定雅とは、京の俳人西村定雅（1744～1826）の二

（与謝野町教育委員会）

時の贈り物 [第52回 西禅寺の阿弥陀像]

まちの文化財

石

川区の西禅寺（臨濟

を示す仏像です。

鎌倉時代の阿弥陀立像は、

特徴のある木造阿弥陀如来立像があります。

西禅寺は、今から約700

年前の室町時代以前には淨土宗に属しており、阿弥陀如來立像は鎌倉時代後期に「淨土宗西禪寺」の本尊として安置されました。

阿弥陀如來立像は、衲衣（まとめた布を巻いたような僧衣）と偏衫（半身で露出した肩に掛ける僧衣）を重ねてまた、右手を曲げて前方へ出し来迎印を結び、左手は下にあります形をとっています。地髪部にボリュームを持たせ、髪際をうねらせる表現など、宋代彫刻の影響がうかがわれ、やや猫背で頭部を前傾させる姿勢や細かな木寄せなどから、鎌倉時代後期の技巧



● ● ● ●
木造阿弥陀如來立像
● 場所／与謝野町字石川 西禅寺
● 指定等／町指定文化財（彫刻）
● 管理者／西禅寺
● 製作年代／鎌倉時代

（与謝野町教育委員会）

の除夜の鐘が鳴り始めるころになると、寺を開放することから仏像が拝見できます。寺や護持会の人々により、年越しそばや甘酒が振る舞われ、その年の108つの煩惱を払うために、一般の人でも鐘をつくことができます。

西禅寺では、毎年12月31日